

挺身して居る第一線部隊の卒業生を動員し、その日頃の研究の一端を集めて發表した事は、誠に意義ある事であり、混沌たる地理學界は、此の書に依つて、一つの建設の、従つてまた批判の具體的なものを持つたと云ふ事が出来るであらう。

全二十五篇は四部に分たれて居る。その内容は次の如くである。

(一)

- 小牧實繁 日本地政學の主張
- 米倉二郎 地理學と世界觀
- 野中健一 地理教育我觀
- 宮川善造 滿洲國家地理序說
- 川上健三 資源論

(二)

- 柴田孝夫 我國土の地理學的省察
- 木村憲治 我國に於ける米穀需給關係
- 淺井得一 邦人の氣候適應性に就いて
- 村木達郎 日本疾病地理學序論
- 瀧木貞一 地理的環境としての衣食住

(三)

- 小葉田亮 近世諸家に於る興亞思想
- 室賀信夫 近世蝦夷地開發論の地理學的視角
- 辻田右左男 吉田松陰と國防地理學
- 藤田元春 佐藤政養先生と其地圖

野間三郎 明治時代と人種問題

(四)

- 和田篤憲 道路と開拓
 - 吉田敬一 日支交通史より見たる五島平戸列島
 - 別枝篤彦 詩經と楚辭とに現はれたる風土的性格
 - 小野鐵二 米國の西進と東亞經濟圈と關聯して
 - 中江 健 日滿支ブロック内の砂糖の需給(豫報)
 - 田中秀作 東邊道開發の地理的意義
 - 島 之夫 滿洲國の道路型と聚落型
 - 野澤 浩 需給關係より見たる北支(蒙疆)炭の特殊性
 - 岩根保重 支那トルキスタンの政治的構造
 - 御子柴幸一 英領四太平洋諸島に於る單一栽培
- 今此處で此等の論文を一々紹介する餘裕がないけれども、此等の論文の全體を通じて、一つの方向を認める事の出来るのは、非常に喜ぶべき事と言はねばならない。これより數ヶ月前に發表された小牧教授の「日本地政學宣言」と併せ考へる時、京都帝大地理學教室がその進む道を明確に把握した事を知り得るのである。次に發表せられるものに大きな期待を持ちつゝ、その健闘を祈る次第である。

皇紀二千六百年に間に合す爲か、校正が不充分なのは本書の價値をいさゝか傷つけて残念である。

(古今書院發行、五六〇頁、菊版定價五圓五拾錢)(川上喜代四)

國史善本集影

大阪府立圖書館編纂

皇紀二千六百年の佳歳を迎へ、それを記念すべき各種の計畫のあつた中で、その劈頭一月、大阪府立圖書館では國史關係書の善本を蒐集展覧された。到つて地味な催であるから、一部學界を除いてはあまり世人の注視を得られなかつたが、我が史學界のためには、此上もなき結構な計畫であつて、吾人數日に亙りて拜見に出かけ、これら善本に接して、書籍のみの持ち得る特別の味に親んだのであつたが、またそこから汲み出された日本の味を、齎しめ齎みしめてしたものであつた。今やその中の代表的なもの八十數點が、殆んど原寸大の高級玻璃版として印影出版された事は、實に恰好の記念事業でなくて何であらうか。

收むる所、伊勢大神宮儀式帳以下若干の神祇書の外に、記紀以下六國史や大鏡榮花物語正統記の如き通史に屬するもの、延喜式北山抄等の法制書に附するに諸家の日記類や系譜地誌の類にまで及び、歷朝紹述の遺烈を肅慕し國體の淵源を闡揚しつゝ、聖代に生を享くる感激を新にするものゝみである。

裝幀また高貴、繕きつゝ、國史の成跡を回顧し、靈山石室の珍藏に接する事が出来て、實に偉觀である。(京都小林寫眞製版所發行定價貳拾五圓、二百部限定出版)(中村直勝)

京都古習志

井上賴壽 著

民俗學は新しい國學としてあるべきであるとの柳田國男先生の言葉は深い含蓄をもち、われ／＼に種々の示唆を與へるものであ

る。この言葉の意味づけを今こゝで取上げるのは適當ではないが、想へば民俗學の自覺、民間生活の諸現象への注意の高まつたのは、端的に言つて所謂國學の勃興と相前後して來り、實に先づ國學者流の手に育てられたことから、次第に成長して今日の繁榮を築くに至つたのである。民俗學の史學史的反省はこれらの學者の存在を大きな價值をもつて見出すであらう。このことは併しながら偶然ではなかつた。國學と言ふ語によつて理解されるところはやがて民俗學の據つて立つべき地盤であつたからである。

京都古習志の著者が明治の偉大な國學者の家に生れ、その薰陶を受けたことも、従つて又極めて自然な成行であると言はなければならぬ。のみならず著者は稀に見る優れた民俗採集家として國學の間に常に推服されてゐるところであり、青英の激務の傍、寸暇を利用して山城一圓はおろかその周圍の諸國村里を殘る隅なく跋渉し、多年蒐集の資料は公にされる日を早くから期待されてゐたものであつた。さうしてその要望に對へたのが先に京都民俗誌であり、今又第二勞作として本書を編まれたのである。洵に同慶の至りに堪へない。

本書の内容は二部をなしてゐて、一は神社祭祀の氏子組合である宮座に就いて、他は同じく信仰地縁集團なる講に關する資料集である。故老の傳承を忠實に記録し、土地の言葉を重んじ、加ふるに手づから撮した寫眞四十五葉を挿んで作られた菊版四百頁は、讀み難いばかりにぎつしりと組まれてはゐるが、讀者には快い苦痛を與へるであらう。